

51 医学資料としての彩色図・カラー写真の歴史

長門谷洋治¹⁾・寺畑喜朔²⁾・坂上俊之³⁾

医学資料を形づくるものとして図や写真は重要である。それはあるときは患者の病状を記録するものとして、あるときは教材として、あるときは学術論文や学術書に掲載するために用いられる。媒体として映画やビデオ、インターネットが利用されることもある。

疾患によっては肉眼的(マクロ)なものだけでなく顕微鏡的(ミクロ)なものが必要となる。

芸術作品で病気を描いたものもある。わが国では『病草子』『異本病草子』が有名だ。また学術的な一般図譜としては本草図や植物図が内外ともに知られる。

医学で図があらわれる最初は解剖学であろう。近代になつてからは眼科学や皮膚科学(性病学を含む)で図、ことにカラーが重視されるようになった。ここで皮膚科学

における初期のカラーについてみてみよう。中西淳朗氏によると初期の彩色版画として新頓(ニュートン)著、荻野為臣関の『黴療新報』(和本、一八七六)があると言われる。梅毒の臨床図や『蒸氣浴図式』が示されている。一九〇〇年にムラツエック著、筒井八百珠訳述『皮膚病図譜』が出る。翻訳によるカラー図で、一部モノクロ写真も付すが、現在に通じる本格的な皮膚疾患アトラスである。〇三年に土肥慶蔵『日本皮膚病黴毒図譜』が公刊。最初の日本人症例で成る彩色石版図で、絵は画工 伊藤有による。解説にはモノクロ写真も付す。石版図はA3版の用紙に一図がゆつたりと描かれ、七年間にわたり十帙・五十図に及んだ。本邦皮膚科学史の上でも画期的な業績である。土肥はさらに一八年に『彩色皮膚病図譜』を出す。彼は皮膚病変を再現するものとして留学中にムラージュ(蠟製模型)の技法を学び、これを前出伊藤らに伝えて製作せしめた。この立体像を印刷、つまり平面化して表現するために土肥は三色版を利用し、そのカラー化に成功した。

カラー写真は一九二七年、イーストマンコダック社の

コダカラーに始まった。しかし外国ではすでに二三年に皮膚疾患のカラー撮影を行っている。同社は三四年にコダクローム(リバーサル)を発表した。わが国では「さくら」や「富士写真フィルム」がカラーにいちどみ、後者は四八年にリバーサルフィルム、五八年にネガフィルムを発売する。カラーフィルムは三五年ころから用いられるが、わが国で印刷原稿にこれが取入れられたのは五〇年代後半になってから。ちなみにカラースライドが用いられるのは、たとえば日本皮膚科学会では五一年の総会宿題報告・湿疹で北村包彦氏のそれが最初であると(小堀辰治氏による)。学術面ではリバーサルが愛用され、富士写真フィルムでは一九六一年に感度の良いものを市場に出したという。

さて〇三年の『日本皮膚科学会雑誌』の前身誌に桜根孝之進が、見事な彩色のハンセン病の組織図を掲載している。顕微鏡写真はすでにローベルト・コッホにより実用化されていたが、わが国で用いられるのはかなりのこのことになる。桜根のそれは技術者に描写させたものと推察する。大正初期の東大皮膚科学教室には巨大な顕微

鏡写真撮影装置が備えつけられていた。その後染色された組織そのままが写真により再現されることになり、また電子顕微鏡写真なども出現した。

彩色図やカラー写真が重宝されるのは見覚えが良い、情報量が多いなどのことがあるが、目的意識をきつちりと表現することが重要である。カラー写真が出現して彩色図やムラージュは消えさったが、「写生図は眼と絵筆を通すことにより抽出、あるいは昇華作用を経た真実性がある」(北村辰彦氏)との言もあり、のこされた彩色図を保護・保管していくことが必要であろう。

本文を記すにさいし中西淳朗先生、菊池一郎先生および富士写真フィルム株式会社よりご教示をいただいた。心から感謝します。

(1)大阪府豊中市

(2)富山県高岡市

(3)京都府城陽市